

# 小学校教員養成過程における 英語力育成プログラム構築に関する基礎研究 —視覚教材を使用したティーチャートーク力に焦点を当てて—

## Preliminary Research on the Development of a Teacher Talk Training Program Using Visual Aids

小 柴 和 香  
Waka KOSHIBA

### 要旨

本研究は小学校教員養成課程における英語力育成プログラム構築に関する基礎研究である。2019年度施行の教育職員免許法改正に伴い、教員養成課程において小学校英語教育関連科目が必修となった。必修となった関連科目においては小学校英語の授業実践に必要とされる英語力の獲得が求められており、今後は教員養成課程において「何を」「どのように」指導するのか、授業内容の充実が求められる。本研究では、小学校英語の授業実践に求められる英語運用能力のうち特に話す力に関し、学習指導要領に掲げられた目標、小学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムで示された内容、教師の話す英語の意義とその方法に関する文献の3つより考察した上で、「適切な程度の英語の音声運用能力」「身近な話題について児童が理解できるよう視覚教材を使用しながら話す能力」「児童の反応に臨機応変に対応できる能力」という3つの能力に絞り、それらの育成を目指すプログラム構築とその成果の検証を試みた。実践は2019年度実施の関連科目における課題を改善する形で2020年度夏学期に行い、授業後にアンケート調査を行った。2020年度夏学期は、新型コロナウイルス感染予防対策のため遠隔授業実施となり予定を変更せざるを得なかったが、遠隔授業での実践であってもプログラムの成果が期待できることを具体的な方法と課題と共に示すことができた。

キーワード：小学校教員養成，小学校英語，小学校教員の英語力，ティーチャートーク，  
ティーチャートーク・ストラテジー

### 1. はじめに

2011年度より本格化した小学校外国語教育（基本は英語とされているため以降は小学校英語教育とする）の学習指導要領における目標としては一貫して「音声を中心としたコミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力の育成」が認められることより、音声を中心とした小学校英語教育においてその目標となる資質・能力育成の実現には、小学校教員の英語力・指導力に負うところが非常に大きく、今後教員には音声に関連する専門的な知識と指導技術を身につけることが求められることになる。このような背景のもと全国の教職課程において、小学校英語の授業実践に必要な英語力、特に話す力の育成は急務である。2017年3月に告示された学習指導要領の改定に伴う小学校英語教育の低学年化と教科化を受け、教職課程も大幅にその内容が見直されることとなった。それに関連し、文部科学省委託事業「英語教員の英語力・

指導力強化のための調査研究事業（英語）コア・カリキュラム」（東京学芸大学，2016；2017）において「小学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラム」（東京学芸大学，2017：pp.65-71）がその成果として開発された。これには新たに教職課程に追加される2科目（「外国語の指導法」と「外国語に関する専門的事項」）の学習内容として、小学校での英語授業実践に必要な知識，指導技術，英語力に関する詳細が示されている。2019年度施行の教育職員免許法改正に伴い小学校教員養成課程において上記2科目が必修となり，本学でも新たな基準に基づく教職課程が開始され2年目を迎えている。

「小学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラム」（以降はコア・カリキュラムとする）に示された内容は，英語を専門としない学生にとっては学習内容が多岐に渡り（酒井・内野，2018；佐藤，2019），小学校英語の授業実践に必要な英語力については「小学校における外国語活動・外国語の授業を担当するために必要な実践的な英語運用力を，授業場面を意識しながら身に付ける。」（東京学芸大学，2017，p.68）と説明されている。具体的な英語力の指標としてはその目安が英検2級であることが大学教員，指導主事，有識者・学会からの意見報告として示されている。一方で指標を示すことに反対する意見も有識者・学会から報告されており，「そもそも小学校教員に求められる英語力が数値で測れるものではない…（略）資格を取る事が自己目的化してしまい…（略）」という指摘を報告しつつ，「英語力については，外部資格検定試験等の指標は提示せず，授業に必要な英語力を段階ごとに示す。」（東京学芸大学，2017，p.117）としている。ただし，今後教員として勤務し始めた後に英語力を底上げすることは難しいため，やはり教員教職課程においてある程度の力を身につけておく必要があるとして英語力向上の必要性をまとめている。今後の教員養成課程における小学校英語教育関連科目では，一般的な英語知識に加え専門的かつ実践的な内容を扱うことが求められることになり，何をどのように指導することが可能なのかを見極めた上で，効果的な実践プログラムの構築，さらに新たな制度の下，現場に出る教員の実情把握，プログラムの効果検証も必要となるであろう。そこで本研究では小学校英語教育における授業実践に必要な英語力育成プログラムの構築を目指すにあたり，特に話す力に焦点を当て，どのような指導内容や方法が可能なのかを検討していく。2020年度夏学期はコロナ禍での実践で多くの制約もあったが，取り組んだ実践の概要をまとめ，学生を対象とした調査で得られたデータをもとにその成果を考察し，今後どのような実践が効果的なのかを検討する。さらに見えてきた課題を明らかにすることで小学校教員養成課程におけるプログラム開発を目指す基礎研究と位置づけたい。

## 2. 小学校英語教員に求められる英語力の整理

本節では小学校英語教育において，指導者となる小学校教員に求められる英語力，特に話す力に関し，学習指導要領で示されている小学校英語教育の目標，コア・カリキュラムで示された教員に求められる英語運用能力と教員養成課程における関連科目の到達目標，教師の話す英語に関する先行文献からの知見，これら3つの視点から整理をしたい。

## 2.1. 学習指導要領における小学校英語教育の目標達成のために

2020年度4月より完全施行された学習指導要領における小学校外国語活動（第3学年及び第4学年対象）と外国語（第5学年及び第6学年対象）の目標は次の通りである（文部科学省、2017、下線筆者付記）。

### 小学校外国語活動の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違いなどに気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。
- (2) 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。
- (3) 外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

### 小学校外国語の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語の違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な能力を養う。
- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

こうして見ると小学校英語教育においては、まずは音声を中心とした指導のもとコミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力の育成を目指していることが改めてわかる。音声を中心とした小学校英語教育において、その目標となる資質・能力育成の実現には小学校教員の英語力・指導力に負うところが非常に大きい。特に2020年度より教科となった「外国語

科」の目標では言語技能に関し、外国語活動の「…に慣れ親しむ」という表記から「…を身につける」という表記に変わり、言語能力の定着が求められていることを考えると、今後は小学校教員に子どもの第二言語習得についての専門的な知識と指導技術が求められることとなり、教員養成課程においても関連事項を取り扱う必要がある。児童の発達段階に応じた総合的なコミュニケーション能力育成に向けて高度な英語指導力が求められ、扱う内容も多岐に渡ると考えられるが、ここではまず教員が身につける英語力、特に話す力に関し、学習指導要領の目標より次の2つにまとめることとする。1つ目を日本語との音声の違いに気づかせ語彙や表現に慣れ親しませるための「正しい英語の音を発する能力」とする。英語の音を発する能力には個々のアルファベットに対応した音、文全体のリズムやイントネーションに関する知識理解とその応用力が含まれる。次に2つ目を「身近な話題について英語で話すことができる能力」とする。授業内で児童と何らかのコミュニケーションを実現するためには指示英語やターゲットとなる学習項目（例えば好きな動物や食べ物についてのやりとりなど）だけでは限界がある。そのためこの能力には教員や児童の日常、身の回りの話題について児童がわかるように話す方法や技術の理解とその応用力が含まれる。これら2点を教員養成課程で扱う場合、1つ目の「正しい英語の音を発する能力」について、その指導方法やトレーニングはある程度イメージしやすい。一方、2つ目の「身近な話題について英語で話すことができる能力」を身につけるためには、どのような指導方法やトレーニングが効果的なのだろうか。もちろんゆっくと、わかりやすい英語で、ジェスチャーや表情などを使うといったことは誰もがすぐ頭に思い浮かべるであろう。しかしこれだけでは児童を対象に「身近な話題について英語で話すことができる能力」を身につけることはできないことは容易に想像できる。身近な話題について、英語初学習者である児童が理解できるように英語で話すためには、一般的な英語の「スピーキング力」の向上を目指すトレーニングとは違った特別な方法や技術の理解と応用が求められると考えられる。そのためには具体的にどのような方法があるのだろうか。次に東京学芸大学（2017）開発のコア・カリキュラムで示されている教員に求められる英語運用能力を調査報告と共に見ていきたい。

## 2.2. コア・カリキュラムで示された教員の英語運用能力

コア・カリキュラム（東京学芸大学，2017）では教職課程に新たに追加された「外国語の指導法に関する科目」と「外国語に関する専門的事項に関する科目」それぞれの目標と学習内容が項目別に示されている<sup>1)</sup>。小学校教員に求められる英語運用能力については、「外国語に関する専門的事項に関する科目」の目標として示されており、その中で、前項でまとめた「正しい英語の音を発する能力」「身近な話題について英語で話すことができる能力」に関連する箇所は下記の通りである（下線筆者付記）。

【2】外国語に関する専門的事項に関する科目

【全体目標】 小学校における外国語活動・外国語科の授業実践に必要な実践的な英語運用力と英語に関する背景的な知識を身に付ける。

【学習内容】

## 1. 授業実践に必要な英語力と知識

### (1) 授業実践に必要な英語力

#### ◇一般目標

小学校における外国語活動・外国語の授業を担当するために必要な実践的な英語運用能力を、授業場面を意識しながら身につける

#### ◇学習項目

③話すこと (やりとり・発表)

#### ◇到達目標

2) 授業実践に必要な話す力 (やりとり・発表) を身につけている。

(2) 英語に関する背景的な知識

#### ◇一般目標

小・中学校の接続も踏まえながら、小学校における外国語活動・外国語の授業を担当するために必要な背景的な知識を身に付ける。

#### ◇学習項目

①英語に関する基本的な知識 (音声・語彙・文構造・文法・正書法等)

#### ◇到達目標

1) 英語に関する基本的な事柄 (音声・語彙・文構造・文法・正書法等) について理解している。

「身近な話題について英語で話すことができる能力」に関し、当然ではあるが児童を対象とした授業が前提となっていることより、聞き手である児童とのやりとりができる力が求められていることがわかる。英語全般に関する知識については総合的な知識を身につけることが求められているが、全体目標として「…授業を担当するために必要な実践的な英語運用能力…」と明記されており、特別な事情がない限り音声を中心としたコミュニケーションの成立に必要な力が求められていると言える。これに関し、コア・カリキュラムではその解説で

質の高いインプットを児童に与えるためには、英語特有のイントネーションやストレスを理解し、正確に運用できることが肝要である。また児童の発言を適切に言い直したり、児童の発話を引き出すような効果的な語りかけ方を身につけるためには、相手意識を持って自分の思いや考えを伝える「意味のあるやりとり」ができる適切な場面を設定して練習することが重要である。(東京学芸大学, 2017; p.102)

と説明を加え、養成課程における関連科目の授業内容を考える際の基本的な考え方として捉えることができる。さらにこれに先立つ有識者・学会からの意見として挙げられた以下の5点も具体的でどのように「身近な話題について英語で話すことができる能力」を指導するかを考える際に非常に役に立つ(下線筆者付記)。

- 英語の音声面の特徴を理解し、聞き手にモデルとしての適切な程度の英語を使用できる。
- 聞き手を意識して、言い直したり繰り返したりして伝える工夫ができる。
- 自分や身の回りのことについて、聞き手が理解できる表現、視覚教材を使って3分程度の話ができる。
- 児童の使う英語に対してリキャストできる。
- 段階的に英語を使用して子供達を段階的に育てる見通しをもち、それに応じて表現を選択できる。(p.27)

また、関連科目における「授業観察や体験・模擬授業」に関し、有識者・学会からの意見として「(養成課程における)授業担当教員による実演」「映像視聴・授業参観」「模擬授業」の3つの学習形態を通して指導技術を学ぶことは有意義だと考えられていることが浮き彫りになった(p.26)」と報告している。

こうしてみると前項でまとめた2つの能力の1つ目「正しい英語の音を発する能力」については、その程度を「適切な」程度とやや幅を持たせて解釈することが可能となり、2つ目の「身近な話題について英語で話すことができる能力」については「身近な話題について視覚教材を使って3分程度の話ができること」と具体的な目標を設定することが可能となる。教員の身近な話は児童が黙って聞く時間ではなく、内容に関連した児童からの反応(必ずしも英語で反応するとは限らない)も十分考えられる。「児童とのやりとりができる能力(コミュニケーションを成立させる能力)」として、「言い換えや、児童の使う英語に対してリキャストする力」も当然のことながら必要となる。以上より小学校英語の授業実践に必要な英語力、特に話す力について2.1.で見た「正しい英語の音を発する能力」については「適切な程度の英語の音声運用能力」、「身近な話題について英語で話すことのできる能力」については、より具体的に「身近な話題について児童が理解できるよう視覚教材を使用しながら話す能力」「児童の反応に臨機応変に対応できる能力」とすることができる。(尚「適切な程度」については3.1.1.でまとめることとする。)

### 2.3. 英語学習における教師の話す英語(ティーチャートーク)の意義とその方法

外国語学習における理解可能なインプット確保の重要性については現在では一般的に広く受け入れられている(Lourdes, 2009)。教師は学習者の理解を少しだけ上回るレベルの学習目標言語によるインプットが提供できるよう授業に工夫を凝らす必要がある。その際様々な工夫のもとになされる教師の話す言葉はティーチャートークと呼ばれ、近年では海外の事例や知見(Lightbrown & Spada, 1993; Wong-Fillmore, 1985; Chaudron, 1988)<sup>2)</sup>を土台に、その特徴や方略方法(=ティーチャートーク・ストラテジー)を分析し、それらの応用を提案するものもある。これらは言語学習において目標言語を使用する授業実践に向け参考にはなるが、日本のように英語を外国語として学ぶ環境では応用しづらいものも多いことは否めない。湯川(2017)は中学教員に対する授業改善指導の実践経験から、英語による授業実践のための考え方として①英語による授業の実践を実現するためには日本語による文法説明や日本語訳による英文理解というそれまでの指導法そのものも連動して変える必要がある。②初学習者に対して英語による授

業を実施する場合には教師の話す英語を理解可能にするためのヴィジュアルエイズ（パワーポイントのスライドで示す画像やピクチャーカード、実物などの視覚資料）が不可欠である。③コミュニケーションの実現のために本当の情報のやり取り、スモールトーク<sup>3)</sup>（学校の様々な場面で学習者の興味関心をひきつけたり、アイスブレイクのような役割をするものでここでは英語で実施するそれを意味する）を加えることが望ましい。④英語の語義について言い換えたり、適切な例文を産出できる英語力が求められる。⑤長期的な英語学習の見通しを持つことが求められる。の以上5つ（いずれも筆者要約）を挙げ、これらの考え方は小学校英語の授業実践にも応用できることを小学校現場の実例とともに紹介している。授業で英語を使うためには一見高度な英語力が必要と思われるが、小学校の英語授業実践で求められる英語力は高度な語彙や複雑な文章が正確に言えるかどうかという力の有無よりも、教師が使うティーチャートーク・ストラテジーの技術の有無が関連する（湯川、2017）とし、それらが教員養成課程であまり扱われていないことにもふれている。三ツ木（湯川編、2018、pp.130-144）は自身の小学校英語教育実践をもとにティーチャートークの意義とその方法についてまとめている。三ツ木は「英語を聞く時間自体が少ない児童にとって、教師の話す英語＝インプットは何物にも替え難い大切なものとなる」としてその意義を、児童自身が何とかして英語を聞いてわかろうとする態度の育成、わからない単語があっても全体から推測し、聞き続ける姿勢の育成につながるとまとめている。さらに自身の実践例を紹介し、教師によるスモールトーク実践でのティーチャートークの特徴、授業内での様々な活動場面でのティーチャートークの特徴をそのストラテジーとともに詳細に説明している。教師の話す英語や想定される児童からの反応、さらに児童とのコミュニケーションを成立させるために教員がどのように反応するのか、授業の流れの一部が英語スクリプトで示されており、英語を使用した授業の流れをイメージするのに非常に役立つ。このように見てみると、小学校教員養成課程で一般的な英語の知識だけではなく、英語で授業を実践するためのティーチャートーク・ストラテジーの手法を学び、その応用力を実践とともに身につける機会が増えれば、児童が理解できるように話し、さらには児童の反応にも臨機応変に対応できるティーチャートーク力の育成が可能となるのではないだろうか。そこでティーチャートーク力育成プログラムの構築を目指すにあたり、上記文献より小学校英語教育における授業実践に応用でき、尚且つ英語を専門としない大学生にとっても比較的取り入れやすいと考えられるティーチャートーク・ストラテジーを表1（2.3.の湯川②の「視覚資料」は「視覚教材」とした）にまとめた。これらを教員養成コースの小学校英語教育関連科目で扱うにあたり各項目の留意点をまとめておく。1.については比較的取り入れやすい項目ではあり、写真や手描きによる教材の使用も可能であるが、今後の教育現場におけるICTの活用の可能性を見越し、基本はパワーポイントなどのプレゼンテーションソフトを使用した自作教材とする。視覚教材を見れば、そして見せ方次第では授業の流れにメリハリを持たせることが容易にできる。しかしここでの視覚教材の使用はあくまでも英語を聞いて理解するための補助的な役割がその使用目的であることに留意し、見せ方やその視覚教材と自分の話す英語とのバランスに注意を払う必要がある。3.についてはかなり高度な英語力が求められること、普段から英語の辞書を使い、わかりやすい例文を作る練習が求められる。4.について例えば What do

you think of ~? という Wh-Question で聞かれるよりも Do you ~? と聞かれた方が答えやすいように、小学校現場で児童とのやりとりを誘発するストラテジーである。相手が Yes/No で答えた際にその児童の答えにうまく英語で反応する力を身につけていきたいところである。これらの留意点をおさえた上で、2.2. でまとめた3つの能力「適切な程度の英語の音声運用能力」「身近な話題について児童が理解できるよう視覚教材を使用しながら話す能力」「児童の反応に臨機応変に対応できる能力」の獲得を達成するために、教員養成課程におけるプログラムの構築・実践を試みた。次にその概要をまとめることとする。

表 1. 取り入れやすいと考えられるティーチャートーク・ストラテジー

1. 視覚教材の効果的な使用（何でもかんでも先に絵を見せない）
2. ジェスチャーや表情などの効果的な使用
3. 聞き手がわからない単語を身近にある話題を出しながら理解させる
4. Yes, No Question による聞き手とのやりとりの確保
5. リアルな情報の提示

### 3. 小学校英語教育の授業実践に必要な英語運用能力育成プログラム構築の試み

#### — 視覚教材使用によるティーチャートーク力育成を目指して—

#### 3.1. プログラムの実施クラスと概要—前年度から課題を踏まえて—

文部科学省の再課程認定対象となった科目の設置により、2019年度より実施の本学小学校コースにおける小学校英語教育に関するカリキュラムは表2の通りである。下線が必修科目となっており、本学では2年生以降は小学校英語教育関連の必修科目はない。2019年度筆者が担当した小学校英語教育関連の科目は「英語探究の扉」「教科内容論（英語）」「初等英語科教育法」であった。このうち「教科内容論（英語）」と「初等英語科教育法」は文部科学省の再課程認定申請対象科目であり2020年度もシラバスの変更はないため、「英語探究の扉」において授業内容の改善を試みた。

「英語探究の扉」では2019・2020両年度共に「小学校英語の授業実践に必要な英語運用能力の育成」を目指しているが、2019年度の学生の反応、授業アンケートより課題が浮かび上がったためその改善を試みた。表3は「英語探究の扉」における指導項目について2019年度から2020年度への改善点をまとめたもので下線が改善箇所である。2020年度は書くこと、読むこと、はほとんど扱っていない。また指示英語については当初予定していたトレーニングは遠隔

表 2. 小学校コースにおける 2019 年度以降の初等英語教育関連科目

1年		2年		2-4年	
夏学期	冬学期	夏学期	冬学期	夏学期	冬学期
<u>教科内容論（英語）</u>	<u>初等英語科教育法</u>		初等英語科教育演習	児童英語教育実践研究Ⅰ	児童英語教育実践研究Ⅱ
<u>英語探究の扉</u>	<u>育法</u>				

\* 下線必修科目



表 3. 2019 年度から 2020 年度「英語探求の扉」における指導内容の改善点

	2019 年度	2020 年度
焦点を当てた内容	教員に求められる英語力： <u>リスニングとスピーキング</u>	教員に求められる英語力： <u>教員の話す英語、児童に聞かす英語、児童がわかる英語</u>
使用教科書	Inspire 2 (CENGAGE Learning)	Topic Talk (EFL 出版)
発音、リズム・イントネーション	英語の音、イントネーション、 <u>リスニングのコツ</u> <u>シャドーイング</u>	英語の音 ( <u>linking, elision</u> ) イントネーション シャドーイング
教師の話す英語	話し続けるコツ 1min スピーチ ティーチャートーク・ストラテジー パラフレーズ 視覚資料使用による <u>リプロダクション</u> 英語によるプレゼン	話し続けるコツ 教師の話す英語に関する理論と実践 ティーチャートーク・ストラテジー パラフレーズ 指示英語 <u>視覚教材作成と聞かす英語</u> <u>絵本読み聞かせ</u>
英語を読む力	辞書なしで読むための英文構成	
英語を書く力	英語でエッセイ	パラフレーズ練習 (1 回のみ)

授業のため実施できずオンラインでの簡単なテストとまとめにとどまった。

### 3.1.1. 音声面に関する指導の改善点

2019 年度は英語の音声知識についてリスニングのコツに関する明示指導を実施し、その応用として発音指導を試みた。学生対象のアンケート結果によると概ね肯定的な感想がうかがえたが、学生が音声教材にアクセスできるのは授業時のみであったため、英語特有の音を自分で実際に音声化するなど得られた知識を応用する場面が不十分であったことが課題として残った。そこで 2020 年度は音声指導に関して、発音の明示指導（遠隔授業のため Zoom による授業となったが当初の予定より変更なし）に絞り、小学生を対象としたフォニックス教材の 1 つであるアルファベットジングル<sup>4)</sup>の動画、指定教科書<sup>5)</sup>の音声教材（ネット公開のもの）をオンライン上いつでもアクセス可能な自主学習用オンデマンド教材<sup>6)</sup>として用意した。授業で解説をした後、これらを使用した発音練習とシャドーイングトレーニングは基本的には自主学習とした。

英語の発音については小学校英語教育におけるフォニックスの位置付けを説明した上で、2.2. で見た 1 つ目の目標である「適切な程度の英語の音声運用能力」の「適切」を「カタカナ英語からの脱却」（dog がドッグとなったり、bat がバットとなったり日本語の影響で最後に母音を挿入してしまいカタカナ読みになることを避ける）として、この目標を目指すことにした。シャドーイングは当初ループリック（資料 1）使用によるピア評価を予定していたがオンラインによる遠隔授業のためこの実施が難しく、各自自主学習を通してループリックを使用し、4 以上を目指すという目標を設定した上で自己評価に委ねることとした。英語の音の変化について比較的応用しやすいもの（linking, elision）の明示指導と応用（文章を声に出して読む練習）を毎回の授業で行ない、Zoom 上で全員が声に出して練習をする時間を設けた。実際は学生の

パソコン接続環境やタイムラグが生じたが授業進行にそれほど支障が出たわけでもなく、学生側からもこの内容や授業の進め方に関しては特に否定的な意見はなかった。

### 3.1.2. 教師の発す英語に関する指導の改善点

2019年度は1分間のスモールトークとパラフレーズ力を身につけることを目標とした。小学校での英語授業開始時に行うアイスブレイク的な意味合いでのスモールトークを想定し、「英語探究の扉」の授業開始時にペアで1分程度のスモールトークを実施した。学生は毎回、前の週に与えられるテーマにちなんで、1分程度のスモールトークを自宅で練習し、授業では書き出しておいたキーワードを見ながらペアを組んだ相手に向かって話すことが求められた<sup>7)</sup>。コース全般を通して表1の項目を意識したパラフレーズ練習を中心に進めたが、視覚資料については2019年度指定教科書<sup>8)</sup>にある写真資料を使用した。コース中盤にグループポスターセッション、最終課題として視覚資料を使用した英語によるグループプレゼンを課題とした。トピックは教科書で扱った内容をベースに自分たちで考えさせた。これに対する学生対象のアンケートでは「視覚資料を使って英語で話したことがなかったので楽しかった」「視覚資料を使用することで自身の話す英語を分析的に考えるようになった」「Yes, No question を使うと友達が答えてくれてやりやすかった」という感想が確認できた。一方で「トピックによっては教科書の英語を暗記してしまい、自分の言葉、相手がわかりやすい英語への言い換えが難しかった」という感想も聞かれ、小学生に英語を教える場面への応用につながる可能性が低いことが課題として残った。

そこで2020年度は、もう少し小学校英語の授業実践に必要な英語力に焦点を当て、「聞き手（児童）が理解できるよう視覚教材を使用しながら話す能力」「聞き手（児童）の反応に臨機応変に対応できる能力」の育成を目指した。自分の話したい内容を理解してもらうための補助となり得る視覚教材を自らが作成し、それらを使用しての3分程度のスモールトークの練習をグループごとに行った。その際に児童とのやりとりを想定し、小学校英語の授業実践に応用可能となるティーチャートーク力の育成を目指すこととした。毎回、グループ内でのスモールトーク発表者以外は児童役となり、発表者は児童役に対して別の英語での言い換えや、答えやすいように Yes, No Question の多用などを意識した。また臨機応変に対応するトレーニングとなるよう児童役の学生も適宜日本語で反応するように説明をした。自作の視覚教材を使用した3分程度のスモールトーク練習はトータルで3回行った。当初、この授業は大学のパソコン教室で実施する予定であったが、遠隔授業のため Zoom ブレイクアウト機能使用による実施となったため、グーグルスライドによる視覚教材作成と Zoom 画面共有に関する指導も含めた。スモールトーク練習開始前には表1のティーチャートーク・ストラテジーの説明、筆者のデモンストレーション、さらに筆者が過去に実施した小学校英語授業動画をいつでもアクセスできるオンデマンド教材として用意し、自主学習によるティーチャートーク・ストラテジー分析を行なった。この一連の流れは前述のコア・カリキュラムで報告された3つの授業形態を意識したものである。スモールトークの評価には英語プレゼンループリック評価表（資料2）を使用する予定であったがオンラインによる遠隔授業実施により、学生はパソコン接続の他にも作成したス

ライドの共有設定、保存先のクラウド設定に関するトラブル回避など発表の際に意識を向けたり、注意をしなければならぬ要素が多すぎたため、各自ループリック3以上を目指すという目標にとどめた。最終課題としては各自がテーマを決め、補助となる視覚教材を自身で作成し、オンライン上全員の前で一人ずつ3分程度のスモールトーク発表とした。ループリックによるピア評価は実施できなかったがクラスメートの発表に対するコメントを記入してもらった。

#### 4. 実践の可能性と課題

本節では2020年度夏学期に教員養成課程で実践した内容に関し、履修学生67人への調査より得られたデータをもとにその成果を考察する。本稿をまとめるにあたり2020年度「英語探究の扉」履修学生を対象に調査を行った。調査の際には個人情報、研究倫理への配慮を説明し同意を得て実施をした。なお本稿ではデータ結果は記述統計のみにとどめた。その理由は夏学期の授業、アンケート調査など全てが遠隔で行われたため学生の負担が予想以上に多く、当初予定していた質問項目を大幅に変更縮小せざるを得なかったため、さらに、本研究をティーチャートーク力育成プログラム構築に向けての基礎研究と位置づけ、分析結果の一般化を求めることを目的としていないからである。前述のとおり今回は遠隔授業を実施せざるをえず、授業後に学生の学びを振り返る意味でのアンケート調査に遠隔授業に関する質問を多数取り入れる必要があった。自由記述の部分に筆者が何度も目を通し項目別に分類したものが表4である。なお同一人物が複数回答しているものもある。

表4. アンケート調査結果の自由記述項目分類

	回答内容	回答数 (人)
YouTube上授業/ 資料動画(クラ スルーム上にあ るアクセス自由 な資料など)に ついて	動画や資料をいつでも見ることができ役立った。	17
	全体的にとても役立った。	3
	動画は繰り返したり一時停止したりできて自分のペースで学習ができ便利だった。	3
	動画は短時間で勉強しやすかった。	2
	Zoom 双方向の授業でやる方がよかった。	1
	ただただと見てしまうので集中できなかった。	1
Zoom と自主学 習用資料などに ついて	自分たちで話し合う時間があって良かった。	5
	Zoom と資料と両方を使いながらの授業は良かった。	3
	Zoom の調子が悪かった間の授業がわからなかったので対応して欲しい。	1
内容について	小学校の英語授業のイメージができた。	10
	Small Talk の練習がたくさんできた。	6
	英語でのやりとりの練習ができた。	5
	スライド作成の方法が身についた。	2
	授業終わりに質問タイムがあったのが良かった。	2
	音声聞き取りにくい時があった。	2
	授業作りの勉強ができた。	1
	シャドーイングの練習ができた。	1
	今までどおり資料を置いておいてほしい。	1
	資料がたくさんあってわかりづらい / 自宅学習なので課題の量を考えて欲しい	1
	もっと質問できる時間が欲しい。	1

#### 4.1. 音声面に関する指導—いつでもアクセス可能な教材使用による自主学習—

音声面の指導に関する2019年度からの改善点は、発音の明示指導と個々のトレーニングをプラスすることであった。そのために学生が自由に音声教材にアクセスし、発音練習を含めたシャドーイングの自主練習を自分のペースで進めることができるようにした。事後のアンケートより、シャドーイングに関しては「計画的に練習をすることができた」「時々だが練習することができた」と答えた学生が全体の87%いることがわかった(図1)。自由記述では「良い発音を身につけるために役立ったと感じた」「練習すれば身に付く力だと思うので計画的に練習できるようにしたい」「シャドーイングは発音改善につながった」「シャドーイング練習の有無でスピーキングも質が変わった」「1回でもやるのが大事だと思った」「続けたいと思う」といった感想が確認でき、今回の方法で行ったシャドーイングトレーニングについては概ね肯定的な反応が確認できた。

一方13%の学生が「練習があまりできなかった」と回答したが、自由記述で「他の課題が多すぎて手が回らない時があった」「期日の決められた課題を優先しどうしても後回しになった」といった感想が複数確認でき、コロナ禍における様々な影響や自主的な学びに対する姿勢の差がこのような結果につながったと考えられる。又、いつでもアクセスできるオンデマンド教材とした音声教材とスクリプト使用に関する質問には70%の学生が「自分の学習に役立てた」と答え、「自分の学習に役立てたいと思ったが実際にはあまりできなかった」と答えた学生は27%いた(図2)。この27%の学生の自由記述では「インターネット接続の問題があった」「学習の計画を一人で立てるのが大変だった」といった回答が複数確認された。音声に関する練習は自主学習であっても、やはり何らかのフィードバックや評価は必要となる。今回は当初予定して

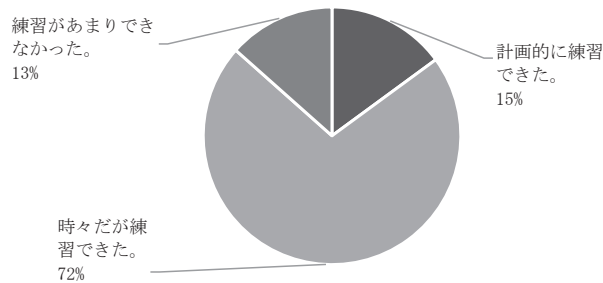


図1. シャドーイングについて (N = 67)

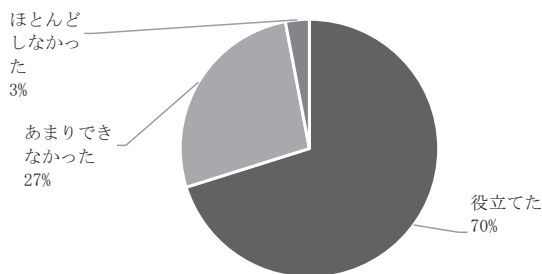


図2. いつでもアクセスできる音声教材とスクリプトの使用について (N = 67)

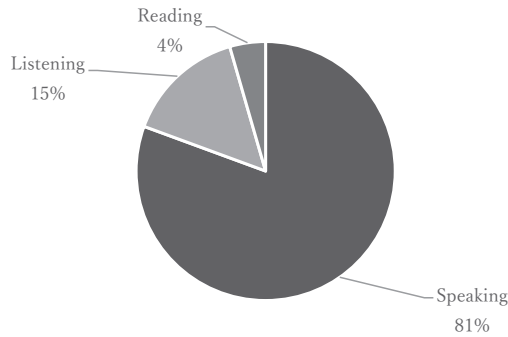


図3. 身についたと思う力 (N = 67)

いたルブリック使用によるシャドーイングのピア評価が実施できなかったが、コース中盤で一度だけ対面授業実施が可能となったため、ペアになりシャドーイングのピア評価を試みたところ学生の感想として「人がやっているとわかったら自分も自主的に進めることができた」「人に聞いてもらいルブリックで評価してもらうことで自分の目標や自分の英語の課題を明確にすることができたため良かった」という感想が聞かれた。フォニックス動画による学習の成果や状況については本調査では扱っていないが、1つ1つの文字の音、文字と文字が繋がりが、英語特有の音の変化が起こるといった知識の応用は概ね成功していたように学生の発表を通して感じ取れた。

#### 4.2. 教師の話す英語に関する指導—視覚教材使用によるティーチャートーク力育成—

教師の話す英語に関する指導について2019年度からの改善点は、自身の言いたいことを、聞いている人（授業内では基本は児童を想定して）にわかりやすくするためのストラテジーを理解し、その応用ができる力を身に付けることであった。特に今回の実践では視覚教材使用によるティーチャートーク力育成を目指した点が特徴と言える。最終課題として全員が一人ずつZoom上でグーグルスライドファイルを共有し3分程度のスモールトークを行なった。実施にあたり途中で操作に戸惑うなどハプニングも多少あったものの概ね順調に進み、時間内に終了することができた。発表後にコメントを書いて提出してもらったが学生間のコメントで一番多かったのは「聞いている人とのやりとりができていてよかった」「聞いている人をうまく巻き込んでいた」といったもので、Yes, No questionの使い方や視覚教材の見せ方などに関する方法の理解と応用を身に付けることができる可能性が感想からも示唆された。中には「絵が多すぎて絵を見たら内容がわかったのもう少し減らしても良いと思う」、発表内容をクイズ形式にして1,2,3の中から答えとなる番号を聞いている人に答えてもらうような流れの発表に対しては「クイズばかりで番号でしか答えなかったのもう少し工夫があると良いと思った」といったコメントもあり、表1で扱った視覚教材の効果的な使用方法を意識している様子うかがえた。コース中盤で実施された対面授業時にそれまでに練習したスモールトークを実際にやってみるといった時間をとったが、学生からは「対面授業の時は表情やジェスチャーを使ってやりやすかったし、人の発表もとても聞きやすかった。Zoom上ではそれができなくて難しかった/残念だ

った。」という感想も聞かれ、表1の2.に関してはオンライン上ではなかなか実感できなかった様子が見えたと。コース全般を通して、音声教材による自主学習と視覚教材使用によるティーチャートーク力の育成を目指したが、終了後のアンケートでは図3の示す通り81%の学生が「スピーキング力が身についた」と感じており、視覚教材使用によるティーチャートーク力育成プログラムの成果を期待できることが示唆された。

#### 4.3. まとめ

本稿では小学校英語の授業実践に必要な英語力、特に話す力にはどのような力が必要か、それらは教員養成課程でどのように育成することが可能なのかを探りつつ、英語力育成プログラムの構築を試みた。まず小学校英語の授業実践に必要な英語力について、話す力に焦点を当て、学習指導要領における目標、コア・カリキュラムで示された教員養成課程における関連科目の目標と有識者・学会からの意見より「適切な程度の英語の音声運用能力」、「身近な話題について児童が理解できるよう視覚教材を使用しながら話す能力」「児童の反応に臨機応変に対応できる能力」という3つに絞ることにした。特に教師が授業で身近な話題について話す力についてはティーチャートーク・ストラテジーに関連した先行文献より、指導可能と考えられる項目として5つにまとめ、それらの理解と応用を目指し児童とのやりとりを想定した実践トレーニングを行った。今回はコロナ禍のため授業が遠隔授業となり予定していたことができなかった面もあったが、学生を対象とした調査の結果、実践した内容について否定的な感想はうかがえず、学生は何らかのやりがいや達成感を感じ取れたと想像できる。授業後の学生による自由記述より「一人でスライドを作って英語で話すなんて最初はできるとは思っていなかったけれど最後には何とかできて良かったです。が、当日は緊張して失敗したので心残りでした。」「スライドを使ってどのように英語を話すのか知ることができて良かったです。」「小学校で英語で授業をするのは無理だと思っていましたが180度考え方がかわり児童のためになる英語教育をしたいと思いました。」など小学校英語教育における英語による授業実践を見据えた感想が多く聞かれ、授業のイメージにつながったことも成果の1つと言えるのではないだろうか。プログラムの成果検証について目標とした項目1つ1つを数値化して評価することは本研究では困難と考え、自分のレベルがどの程度のところなのかを聞き出すツールとしてループリックの使用を試みたが、このループリックそのものに関する調査は行えず、今後はこれらの効果検証と改良を重ねるとともに系統だったアンケート開発なども求められる。

本研究とは直接は関係はないが遠隔授業の影響よりICT活用の整備、随時アクセス可能な教材の利用方法、学習の進め方について、今後はより一層細かな対策や指導が求められることも浮き彫りとなった。小学校英語教育の授業実践に必要な英語力、特に話す力について3つの能力にしまりそれらを身に付けるための実践を試みる過程で、例えば音声教材を利用した学習は自分のパソコンなどでじっくりと取り組む自主学習の可能性が見えてきたこと、さらにそうすることで授業では別の内容を扱うことが可能となることなど、今後の通常授業に戻った際に活用できるツールを学生と教員双方が経験しながら気づいたと言える。遠隔授業の実施は、教員も学生も想像していた以上に学生の自主学習が前提となり、授業のあり方そのものについても考える機会となった。

## 注

- 1) 例えば外国語の指導法に関する科目では1. 授業実践に必要な知識・理解と2. 授業実践に分けられており、全体目標、さらにそれぞれの目標として一般目標、学習項目、到達目標が提示されている。本稿で扱う小学校教員に求められる英語力については1. 授業実践に必要な英語力と知識として全体目標に続き、一般目標、学習項目、到達目標が提示されている (p.68)。
- 2) Lightbrown & Spada は教師の発話を理解可能なものに調整することで言語習得につながると主張している。Wong-Fillmore, Chaudron はティーチャートークの特徴を挙げその役割を項目化している。
- 3) 「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」(文部科学省, 2017) では教師のスマールトークについて「活動の導入部分」を示している。本稿で言うスマールトークは導入部分のみに限定するものではなく、いつでも取り入れることができる英語によるおしゃべりの意味として使用している。
- 4) アルファベットの名前 A とそれが表す音 /æ/, その音で始まる名詞などの単語をリズムと共に声に出して言うチャンツでフォニックスジングルとも呼ばれる。
- 5) *Topic Talk*. EFL 出。小学校の英語の授業で取り上げられそうな様々なトピックをベースとしたスピーキング用教材でいわゆるテキスト英語ではない自然な英語を収録したもの。音声教材はネットで公開されており誰でもアクセスが可能。
- 6) 本学には Google G Suite が導入されていたため遠隔授業の実施に当たり、導入が比較的容易と考えられた Google 社提供の無料学習ツール Classroom を使用した。Classroom では容量無制限での使用が可能であることよりオンデマンド教材として必要となるすべての資料を Classroom に保存した。
- 7) 筆者が過去に使用した TOEFL iBT の Independent Speaking Section 対策の資料より指導を行なった。
- 8) *Inspire 2*. CENGAGE Learning.

## 引用文献

- 酒井英樹・内野駿介 (2018). 「小学校教員養成において必要とされる知識・技能に関する大学生の自己評価——小学校教員養成課程外国語(英語)コア・カリキュラムの点から——『小学校英語教育学会』第18号, pp.100-115.
- 佐藤大介 (2019). 「小学校教員養成課程 外国語(英語) コアカリキュラムにおける「英語に関する背景的な知識」の学習(指導)項目に関する考察」『日本児童英語教育学会』第38号, pp.15-30.
- 東京学芸大学 (2017). 『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成28年度報告書』 Retrieved from [http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/28file/report28\\_all.pdf](http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/28file/report28_all.pdf)
- 文部科学省 (2017). 『小学校学習指導要領』
- 文部科学省 (2017). 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説外国語活動・外国語編』
- 湯川笑子 (2017). 「小学校英語授業における英語使用と日本語使用——いつ、何のために、どのように使うのか——『日本児童英語教育学会』第36号, pp.149-164.
- 湯川笑子編 (2018). 『初等外国語教育』, 三ツ木由佳「ティーチャートーク」第10章 pp.130-144.
- Chaudron, C. (1988). *Teacher Talk in Second Language Classrooms*. In M. H. Long, & J. C. Richards (Eds.), *Second Language Classroom* (pp. 50-87). Hawaii: Cambridge University Press.
- Lightbrown, P. and N. Spada (2013). *How Languages are Learned* (Fourth Edition). Oxford University Press.
- Ortega, L. (2009). *Understanding Second Language Acquisition*. London: Hodder Education.
- Wong-Fillmore, L. (1985). *When does Teacher Talk Work as Input?* In S. M. Gass & C. M. Madden (Eds.), *Input in Second Language Acquisition* (pp. 17-50). MA: Newbury House.

資料

資料 1. シャドーイングのルーブリック

英語探究の扉 / 児童英語活動の研究  
教育学部 小学校コース 小柴和香

シャドーイングのルーブリック

	5 十分満たしている	4 不足はあるが ほぼ満たしている。	3 最低限は 満たしている。	2 努力を要する	1 かなり努力を要する
英語の音	正しい英語の音を理解しており、発音することができる。	正しい英語の音をほぼ理解しており、ほとんどの文字を正しく発音することができる。	正しい英語の音を理解はしているが所々日本語の影響が出る。	正しい英語の音を理解はしているが発音の際に全体的に日本語の影響が出る。	正しい英語の音を理解しておらず発音することもできない。
つながりなど音の変化	英語のつながりや音の変化を理解しており、正しく発音することができる。	英語のつながりや音の変化をほぼ理解しており、ほとんどについて正しく発音することができる。	英語のつながりや音の変化を理解はしているが所々日本語の影響が出る。	英語のつながりや音の変化を理解はしているが発音の際に全体的に日本語の影響が出る。	英語の繋がりが音の変化を理解しておらず発音することもできない。
イントネーション	英語のイントネーションを理解しており日本語の影響も全くない。	英語のイントネーションを理解しており、日本語の影響もほとんどない。	英語のイントネーションを理解しているが所々日本語の影響が出る。	英語のイントネーションを理解はしているが発音の際に全体的に日本語の影響が出る。	英語のイントネーションを理解しておらず発音することができない。

4 以上を目指そう！

資料 2. 英語プレゼンルーブリック評価表

英語プレゼンルーブリック評価表

	5 十分満たしている	4 不足はあるがほぼ満たしている。	3 最低限は満たしている。	2 努力を要する	1 かなり努力を要する
英語	正しい英語を使用する。Teacher talk やスモールトークの意義を理解し正しく応用できている。	ほぼ正しい英語を使用する。Teacher talk やスモールトークの意義を理解し応用できている。	英語使用に不足が見られる。Teacher talk やスモールトークの意義理解が不十分であるが応用しようとする箇所が見られる。	英語使用に不足が見られる。Teacher talk やスモールトークの意義理解が不十分で応用しようとするが成功しない。	正しい英語使用ができない。Teacher talk やスモールトークの意義の理解が不十分で応用もできない。
構成	全体的に流れがスムーズで聞き手の様子を想定し言いたいことを十分に伝えることができている。	全体的に流れがスムーズで聞き手の様子を想定しているが日本語で説明するなどの箇所が見られる。	言いたいことはなんとか伝えられているが聞き手の様子を想定している構成ではない。日本語の使用が多い。	言いたいことがあまり伝えられておらず、聞き手の様子を想定している構成ではない。日本語の使用が多い。	言いたいことが何かわからない。日本語使用が多い。
資料	自分のスピーチにあった効果的な資料作成ができており話す英語とのマッチングも適している。	自分のスピーチにあった効果的な資料作成ができており話す英語とのマッチングに一部不足がある。	自分のスピーチにあった資料作成はできているが話す英語とのマッチングに不足がある。	自分のスピーチにあった資料作成はできているがわかりづらい。	自分のスピーチにあった資料作成はできているがこれがあれば英語を話す必要はないという資料である。
やりとり	やりとりを想定し使用する英語もバラエティー豊富で臨機応変に対応できている。	やりとりを想定し、使用する英語に不足はあるが臨機応変に対応しようとしている。	やりとりを想定はしているが決まった返答しかできない。	やりとりを想定はしているがやりとりを続けることができない。	やりとりを想定しておらず日本語で進めようとする。
態度	はっきりとした声で相手を見て聞き取りやすいよう心がけている。	はっきりとした声で相手を見て聞き取りやすいよう心がけているが所々メモや原稿を読む。	はっきりとした声で相手を見て聞き取りやすいよう心がけているが所々聞き取りにくくメモや原稿を見る回数が多い。	声小さく相手を見ていない。メモや原稿を読む箇所が多い。	声小さく相手を見ていない。終始用意した原稿を読む。



## ゲーグルフォームによるアンケート項目

1. YouTube の動画（授業動画，資料動画全て）について
  - (ア) 全ての動画は自分の学習に役立ったと思う。
  - (イ) 全ての動画は見えていないが自分の学習に役立ったと思う。
  - (ウ) 動画は見たが動画では自分の学習を効果的に進めることができたとは思わない。
  - (エ) 実は動画はあまり見ることはできなかった。
2. 1 の回答について自由記述
3. この授業で英語のどの力がついたと思いますか？
  - (ア) リスニング力
  - (イ) スピーキング力
  - (ウ) リーディング力
  - (エ) ライティング力
4. シャドーイングについて
  - (ア) 計画的に練習することができた。
  - (イ) 時々だが練習することができた。
  - (ウ) 練習することがあまりできなかった。
5. 4 について自由記述
6. オンデマンド教材である音声教材とスクリプトについて
  - (ア) 自分の学習に役立てることができた。
  - (イ) 自分の学習に役立てたいと思ったが実際はあまりできなかった。
  - (ウ) 音声教材やスクリプトはほとんど活用しなかった。
7. 遠隔授業で良かったことを1つ選ぶとしたら？
  - (ア) わからないことなど何度でも動画や資料を好きな時に見て一人で学習を進めることができ効率よく学習ができた。
  - (イ) 資料などがクラウドにあるのでいつでもどこでもクラスルームにアクセスできた。
  - (ウ) 対面授業ではできないこと（常に資料を見る，PC スキル向上他）が可能であった。
  - (エ) ペーパーレスで資料管理ができた。
8. 遠隔授業で困ったことを1つ選ぶとしたら？
  - (ア) 先生にすぐに質問できない。
  - (イ) インターネット接続の問題
  - (ウ) パソコンやスマホ操作に関する問題
  - (エ) 1人で学習を進める計画を立てること。
  - (オ) Zoom で聞いてばかりで疲れる。
9. 授業の到達目標は達成したと思う。（1-5 そう思わない→そう思う）
10. 遠隔授業になって自分の学びの質が変わったと思う。（1-5 そう思わない→そう思う）

